令和七年二月度　御報恩御講拝読御書

寂日房御書

弘安二年九月十六日　五十八歳

経に云はく「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給へ。「斯人行世間」の五つの文字は、上行菩薩末法の始めの五百年に出現して、南無妙法蓮華経の五字の光明をさしいだして、無明煩悩の闇をてらすべしと云ふ事なり。日蓮等此の上行菩薩の御使ひとして、日本国の一切衆生に法華経をうけたもてと勧めしは是なり。

（御書一三九三ページ一三行目～一三九四ページ一行目）

令和七年二月度 御報恩御講 『寂日房御書』 （御書一三九三ページ一三行目～一三九四ページ一行目）

【通釈】

法華経には「日や月の光明が能くすべての幽冥を除くように、この人は世間に行じて、能く衆生の闇を滅する」と説かれている。この文の心をよくよく案じなさい。「斯人行世間」の五つの文字は、上行菩薩が末法の始めの五百年に出現されて、南無妙法蓮華経の五字の光明を高く掲げ、無明煩悩の闇を照らすべしということである。（今、）日蓮等がこの上行菩薩の御使いとして、日本国の一切衆生に法華経を受け持つべしと勧めたのは、この経文に応ずるものである。

【主な語句の解説】

日月の光明の～斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す…法華経如来神力品第二十一（法華経五一六）の文。「斯の人」である上行菩薩が、釈尊滅後の娑婆世界に法華経の行者として出現し、衆生を教化すると説かれている。

幽冥…くらやみ。暗黒。迷いおよび無明に譬えられる。

無明煩悩の闇…無明煩悩とは、無明（一切の煩悩の根本）と煩悩（欲望や妄念のこと、成仏得道の障りとなる一切の迷い）の併称。衆生が無明煩悩に覆われて真理を覚ることができない状態を闇夜に譬えたもの。

上行菩薩…法華経従地涌出品第十五において、釈尊の久遠の開顕を助けるために大地から涌出し、如来神力品第二十一において末法の法華弘通の付嘱を受けた地涌の菩薩の上首。この菩薩は、末法に出現した法華経の行者日蓮大聖人であり、内証は久遠元初の自受用報身如来である。

【背景と大意】

本抄は、戒壇の大御本尊が御図顕される約一カ月前、弘安二（一二七九）年九月十六日、日蓮大聖人が御年五十八歳の時に、身延において認められました。本抄の末文に「此の事寂日房くわしくかたり給へ」（御書一三九四）とあり、寂日房を使者として、大聖人のご両親に関係のある安房国に住む強信の婦人に与えられたと推測できます。

内容は、まず受け難き人身を受け値い難き仏法に出値い、南無妙法蓮華経の題目の行者となったことを称賛されています。次いで「日蓮は日本第一の法華経の行者なり」（同一三九三）と述べ、すでに法華経勧持品二十行の偈を身読したのは日蓮一人であることを明かし、この日蓮を生んだ父母は一切衆生の中でも大果報の人であると仰せられています。また、日蓮との名乗りは自ら仏の境界を悟った故であるとされ、この日蓮の弟子・信徒となることは宿縁が深いためであると思って、日蓮と同じく法華弘通に邁進すべきであると教えられています。そして、この御本尊は後生の恥を隠す冥土の衣装であるとし、信心を怠らずに南無妙法蓮華経と唱えていくことを督励されて、本抄を結ばれています。